

「日本音楽学会国際研究奨励金」受領者報告書

鈴木聖子（東日本支部）

●発表学会について

本発表は、2016年8月25日から27日に台湾で開催された、東アジア音楽研究会 Study Group for Musics of East Asia の第5回国際シンポジウムにおいて行われた。開催地は台北の国立中央研究院民族学研究所と国立台北芸術大学である。

今年で結成10年目を迎えた東アジア音楽研究会は、1947年創設の国際伝統音楽学会 ICTM（創設当時は国際民俗音楽学会）内の研究会のひとつである。本シンポジウムは、母体である ICTM 全体の国際学会と交互に隔年開催される。ICTM 内には他にも刺激的な研究会が多くあるが、本研究会は現在の東アジアの音楽研究者・音楽家たちと密度の濃い情報交換ができるほか、20世紀の東アジアにおける日本の植民地主義に対して現在どのように答えるかという問題に少なからず直面させられることから、日本の音楽研究者にとって非常に有益な経験と視野の広がりを得られる場であると私は考える。

ICTM ホームページ：<http://www.ictmusic.org/>

●研究発表要旨

（セッション）国際舞台の伝統芸能 Traditional Performance on Cosmopolitan Stages)

（発表日時）2016年8月26日9時30分～10時

（発表題目）1930年代フランスにおける日本伝統音楽の表象：言葉博物館の録音コレクションの調査から Representation of Japanese Traditional Music in France in the 1930s : Investigating the Recording Collection of the Museum of Spoken Word [Musée de la Parole]

（要旨）ウィーン・フォノグラムアルヒーフ（1898年設立）とベルリン・フォノグラムアルヒーフ（1900年設立）は、20世紀初頭にヨーロッパの民族音楽学（比較音楽学）形成の基盤となったことでよく知られており、また1997年にはユネスコ記憶遺産にも登録された。これら独逸の録音資料アーカイブの歴史と比較して、フランスの録音資料アーカイブの歴史はフランスにおいてさえ興味を持たれてこなかった。ようやくこの15年ほどの間に、フランス国立図書館視聴覚資料部の研究員パスカル・コルドレクスのもと、その歴史が明らかにされた。本発表は、それらの最新の研究に基づきながら、フランスにおける日本関連の録音資料の収集の内容と歴史を紹介するとともに、1930年代に「言葉博物館」（現在のフ

ランス国立図書館視聴覚資料部)が行った日本伝統音楽の録音資料を分析し、当時のフランスにおける「日本音楽」の表象を明らかにするものである。

1900年のパリ万博開催中、医学博士レオン・アズレがパリ人類学会のために、400本以上の蠟管に世界の言葉と音楽を記録した。このうちの14本に録音された日本の言葉・俗謡は、世界初の日本関連の録音資料として貴重なものである。ここで奇妙に思われるのは、この同じパリ万博で評判となった川上音二郎一座の上演を、アズレのみならずフランスの音楽研究者が録音しなかったことである。奇妙と述べたのは、この時の川上一座の公演は、英グラモフォンのガイズバーグによって録音されており、またその翌年にもヨーロッパ公演を行った一座はベルリン・フォノグラムアルヒーフによって録音されているからである。加えて、むしろ19世紀末以来のジャポニズム旋風のさなかにあったパリ万博で、一座が大きな評判を得ていたにも関わらず録音されなかったのは実に奇妙である(ただし採譜はされている)。アズレの蠟管も、本人の期待に背いてパリ人類学会ではアーカイブとして認識されることはなく、民族音楽研究に資することはなかった。要するにフランスにおいては、浮世絵などの大衆的な日本美術のように、大衆的な日本音楽は研究対象として真摯に認識されなかったといえる。また同じ頃、日本を訪問したフランスの音楽研究者は、日本政府や日本の音楽研究者から雅楽や能などの伝統音楽を紹介されて研究したことから、フランスではそうした伝統音楽こそを研究に値する正統な「日本音楽」として認識する傾向が生じたとも考えられる。

一方、1911年には、フランスで初の国立の録音アーカイブ機関となる「言葉アーカイブ」が、パリ・ソルボンヌ大学内に設置された。近代化による標準語の普及によって地方の言語が失われつつあったこの時期、言葉の録音によってフランスの言語地図を描こうというのが、アーカイブ創設者フェルディナン・ブルノの第一の目的であった。1928年、言葉アーカイブはパリ市と提携して「言葉博物館」となった。前身である言葉アーカイブと比較するならば、言葉博物館はパリ植民地博覧会(1931年)とカイロ・アラブ音楽会議(1932年)といった国際的な音楽文化の交流の機会を通して、地方や世界の音楽の録音に集中するようになったことが特徴として挙げられる。

このような背景にあって、1934年、言葉博物館は、端唄・民謡・子守唄などの大衆的な日本音楽を録音している。この録音に関する台帳などは残されておらず、レコードの盤面の中央に刻まれた演者のM.Haradaという名と、レコードのレーベル部分に書かれた曲の題目やジャンル名があるのみである。M.Haradaという人物については、現時点においては明らかではない。しかし、当時の読売新聞パリ支局長であった松尾邦之助が、言葉博物館と

M.Harada との間をとりもったであろうことが、博物館長ロジェ・デヴィニュに宛てた彼の手紙（現在の国立図書館に所蔵）から読み取ることができる。松尾はその頃、パリのフランス人の友人たちの助けを借りながら、芸者の小唄をフランス語に翻訳して新聞や雑誌に発表するなどして、日仏の文化交流を図っていた。1927年には、岡本綺堂の「修善寺物語」を、在仏日本大使館の依頼・後援によってコメディ・シャンゼリゼで上演した。松尾はその時に得た負の経験から、常に「ハイカルチャー」のみをフランス人に紹介しようとする日本政府側の姿勢に違和感を抱いたことが、彼の自伝に見て取れる。そして同年、宝井其角の俳句を翻訳した松尾の書がパリでベストセラーとなるに及んで、大衆的な日本文化こそフランス人の知識欲を満たすものであることを、彼は認識したものであると思われる。このようなことから、1934年の言葉博物館における大衆的な日本音楽の録音には、松尾が深く関係していると推測できる。

言葉博物館の録音収集は、近代化や植民地主義を背景に、「他者」の音楽を理解しようとするものであった。彼らにとっては日本も「他者」であり、植民地の人々と同様の「エキゾチック」な対象であった。しかし日本もフランスと同じ支配者側の視線を共有しており、その支配者の視点からみて恥ずかしくない日本中心主義的な「日本音楽」像を自ら構築しようとしていた。1934年のフランスにおける録音は、こうした国際社会の力学から生まれた正統な「日本音楽」像を突き崩そうとする、パリ在住の日本人とフランス人の交流から生まれた文化運動のひとつの果実として捉えることができる。

●質疑、反響と感想

本発表後の会場（と会場外）では、フランスの録音アーカイブの歴史についてもさることながら、1930年代のフランスで日本音楽が録音されていたことに対して、非常に興味深かったとの声を多く頂いた。会場内では、それがなぜフランスであったのかという背景をより詳しく説明してほしいという、フィリピンの研究者からの発言を頂いた。これに対してその場では十分に説得力のある説明が出来なかったのであるが、その後のコーヒートークで質問者と会話をするなかで、1930年代の日本の国際的な位置（国連脱退など）を説明するに及んで、ようやく質問者の理解を得ることができた。このことから、国際的な学会では、専門的な調査や分析の結果にのみ集中するのではなく、日本史のさまざまな基礎的な事項を外国語で正確に伝える準備が必要であることを学んだ。

このような貴重な機会を賜りましたこと、住友生命保険相互会社様、ならびに日本音楽学会に、心より御礼申し上げます。